

## 全国食肉衛生検査所協議会病理部会研修会（第57回） における事例報告（I）

海老原成光<sup>†</sup>

全国食肉衛生検査所協議会病理部会事務局東京都芝浦食肉衛生検査所  
(〒108-0075 港区港南2-7-19)

Proceedings of the Slide-Seminar held by National Meat Inspection Office  
Conference Study Group (57th) Part I

Shigemitsu EBIHARA<sup>†</sup>

Shibaura Meat Inspection Center, Tokyo Metropolitan Government  
2-7-19 Kounan, Minato-ku, 108-0075, Japan

(2009年7月14日受付・2010年3月16日受理)

全国食肉衛生検査所協議会病理部会が主催する第57回病理研修会が、2008年5月15、16日に麻布大学で開催された。今回は13機関から18題の事例が提出された。No. 2049およびNo. 2052の2題は再検討となり、No. 2036は再報告となった。以下に今回の15事例の概要を述べる。また、診断名の項に、必要に応じ括弧書きで疾病診断名を併記した。

### 事例報告

#### 1 鶏の体腔内諸臓器の腫瘍

〔森崎 昇 (群馬県)〕

**症例：**鶏（採卵鶏），雌，日齢不明。

**臨床的事項：**平成19年11月14日に搬入された4,527羽中の1羽に認めた。

**肉眼所見：**肺，肝臓，脾臓，腺胃，十二指腸，盲腸および尾根部に0.5～2.0cm大の結節性腫瘍をそれぞれ1ないし数个認めた。腺胃の粘膜面に肥厚したクレーター状病変を観察した。腫瘍は円形から楕円形で，剖面は乳白色，充実性，髄様で周囲との境界は明瞭であった。胸腺は左右とも3.5×3.0cm，2.8×2.0cm大に腫大し，脾臓は2.8×3.8×2.5cm大に腫大していた。他の臓器に著変は認められなかった。

**組織所見：**肝臓の結節では毛細血管や少量の細い線維

組織を伴ってリンパ球様の腫瘍細胞がび漫性に増殖しており，周囲組織との境界部に被膜の形成はなかった。腫瘍細胞には大小不同があり，中型～大型の腫瘍細胞の核は，類円形から不整形で，クロマチンに乏しく淡明で，大きな核小体を1～2個持っていた。細胞質は乏しく，好塩基性を示すものが主体であった。小型の細胞は，類円形で淡明な核を持つものと，粗大顆粒状のクロマチンに富む暗色調の核を持つものがあり，細胞質は比較的豊富で，好塩基性を示すものが多く認められた。他の臓器の腫瘍組織も同様の所見であった。免疫染色では，小型の腫瘍細胞が抗CD3抗体で陽性となった。

**診断名：**リンパ腫

**討議：**発生部位や組織像，腫瘍細胞がCD3で陽性であったことからマレック病を疑ったが，CD3陽性細胞が少数であったため，Bリンパ球抗体での染色も実施すべきとの助言があった。

#### 2 鶏の体腔内腫瘍

〔畔上佳大 (山梨県)〕

**症例：**鶏（肉用種），雌，55日齢。

**臨床的事項：**著変なし。

**肉眼所見：**腹腔内に多数の黄白色腫瘍がみられた。最大腫瘍は，大動脈と肺動脈間にあり，3.0×2.5×

<sup>†</sup> 連絡責任者：海老原成光（東京都芝浦食肉衛生検査所）

〒108-0075 港区港南2-7-19 ☎03-3472-5175 FAX 03-3450-6745

E-mail : Shigemitsu\_Ebihara@member.metro.tokyo.jp

<sup>†</sup> Correspondence to : Shigemitsu EBIHARA (Shibaura Meat Inspection Center, Tokyo Metropolitan Government)

2-7-19 Kounan, Minato-ku, 108-0075, Japan

TEL 03-3472-5175 FAX 03-3450-6745 E-mail : Shigemitsu\_Ebihara@member.metro.tokyo.jp

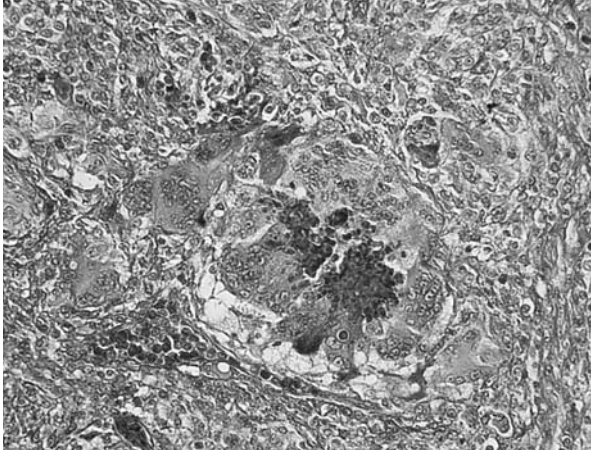


図1 鶏の腹腔内腫瘍，*Aspergillus flavus*による肉芽腫性心筋炎。壊死巣の周囲を巨細胞，類上皮細胞，多核巨細胞が取り囲み，さらにその外周を線維成分が取り囲む肉芽腫がみられた（HE染色 ×400）。（山梨県食検出題）

3.0cm大で，肺および胸壁に癒着していた。右心房内には直径0.8cmの腫瘍が2つあり，剖面は黄白色であった。また，肝臓，腎臓，肺の実質および空腸漿膜面にも同様の腫瘍がみられた。

**組織所見：**腫瘍は，多核巨細胞，類上皮細胞，偽好酸球の集簇巣および広範な壊死巣からなっていた。また，ヘマトキシリンに淡染する管状構造物が随所にみられた（図1）。管状構造物はPAS反応陽性で，グロコット染色によりY字型に分枝し，隔壁を有する菌糸を確認した。なお，分離培養した真菌を用いてスライドカルチャー法を行い，形態を観察したところ，*Aspergillus*属菌に特有な頂囊および梗子がみられた。また，nested PCR検査で，原因菌を*Aspergillus flavus*と同定した。

**診断名：***Aspergillus flavus*による肉芽腫性心筋炎

**討議：**他の真菌との重複感染が疑われたが，PCR法により，*Aspergillus flavus*が確認されていることから上記診断となった。免疫染色で，より診断を確実にすることができるとの助言があった。

### 3 牛の肺の結節

〔田中美香（名古屋市）〕

**症例：**牛（黒毛和種），雌，32カ月齢。

**臨床的事項：**著変なし。

**肉眼所見：**左肺辺縁部に境界明瞭な米粒大～人指頭大の結節が散在し，一部では長さ約6cmに渡り，結節が数珠状に連続してみられた。結節表面には凹凸があり，淡桃色～黄白色で硬結感があった。剖面は黄白色，充実性で，内部に石灰化した部分を多数認めた。結節に隣接した肺の実質にも同様の病変を認めた。その他，肝臓に胆管炎がみられた。

**組織所見：**大小の結節性病変が多数認められた。結節は細気管支周囲に形成されているものや，中心部が線維化したものがあり，大きな病巣では壊死・石灰化しているものもあった。細気管支周囲に形成された結節では，細気管支腔内に好酸球の浸潤や線維素の滲出がみられ，気管支壁から気管支周囲にかけて好酸球，リンパ球，形質細胞の浸潤が認められた。細気管支周囲は線維化し，平滑筋の増生もみられた。中心部が線維化した結節や血管でも，同様の病変がみられた。エラスチカ・ワンギーソン染色で，動脈・静脈ともに病変が認められた。細胞浸潤巣や細気管支内に，少数ながら多核巨細胞がみられたが，チール・ネールゼン染色では陰性であった。

**診断名：**肉芽腫性気管支肺炎（線維化を伴う）

**討議：**演者は好酸球性静脈炎との関連を考えたが，肉芽腫を形成し石灰化している点，平滑筋の増生パターン等の違いから，異なる病理発生であるとの指摘があった。アスベストや肺虫との関連の可能性もあるとの意見もあった。

### 4 牛の縦隔腫瘍

〔望月 新（北海道）〕

**症例：**牛（ホルスタイン種），雌，118カ月齢。

**臨床的事項：**特になし。

**肉眼所見：**気管分岐部付近から肺背縁に沿って後葉肺底縁におよぶ約10×20cm程度の灰白色～灰黄色の円筒状腫瘍を認めた。腫瘍の剖面は灰黄色，髓様で，軽度に腫脹し，一部は線維性に区画され分葉状を呈していた。同様の腫瘍は右肺後葉の実質内に手拳大のものを一つ，右肺底表面およびこれと接する横隔膜の表面，さらには胸壁の表面に直径0.5～3cm程度のものを多数認めた。右肺後葉と横隔膜は強固に癒着し，腫瘍と肺実質との境界は明瞭であった。また，両腎臓の皮質に直径0.5～5cm程度の軽度に隆起する黄白色腫瘍が多発していた。腫瘍の剖面は黄白色，髓様で，腎臓実質との境界は明瞭であった。

**組織所見：**後縦隔部の腫瘍では，明瞭な核小体を持った淡明な核と，好酸性顆粒状に染まる細胞質をもつ類円形細胞や，クロマチンに富む円形の核をもち，細胞質に乏しい小型，円形細胞および淡明な核をもつ紡錘形細胞など，多様な形態をとる腫瘍細胞が認められた。腫瘍細胞のうち，紡錘形細胞は束状に，類円形細胞は線維性の隔壁を伴って胞巣状に増殖し，一部では多核なものも認められた。いずれの細胞も異型性が強く，核分裂像も多かった。

類円形細胞の細胞質はPAS染色で陽性を示し，Desmin陽性であった。

肺や腎臓の腫瘍も同様で，周囲の組織との境界は明瞭であった。

**診断名：**多形型横紋筋肉腫

**討議：**筋原性の腫瘍鑑別については、Desmin以外の免疫組織化学的マーカーも必要との助言があった。

## 5 豚のリンパ節

[大場剛実 (富山県)]

**症例：**豚 (雑種), 去勢雄, 約6カ月齢.

**臨床的事項：**生体検査時に著変を認めなかった.

**肉眼所見：**多数の縦隔リンパ節が、著しく腫大し、胸膜下より隆起していた。リンパ節の大きさは大小さまざま、大きいものは約17×6×6cmあった。腫大したリンパ節は硬く、断面は乳白色、充実性で黄白色の粟粒大の病巣が散在していた。左肺胸膜の一部に線維素の析出を認めたが、左右の肺実質には著変はみられなかった。その他の所見としては両側性に餛胞腎を認めた。

**組織所見：**リンパ節全域で結合組織が著しく増生しており、所々に残存する濾胞と、好中球および巨細胞を主体とする炎症性細胞の集簇巣を認めた。集簇巣の周囲には結合組織が渦巻状に増生していた。また、一部の集簇巣にはグラム陰性菌を含むアステロイド小体が認められた (図2)。細菌学的検査では、*Actinobacillus pleuropneumoniae* 2型が検出された。*A. pleuropneumoniae* 2型抗体を用いた免疫組織化学染色では、アステロイド小体内に一致して抗原を認めた。

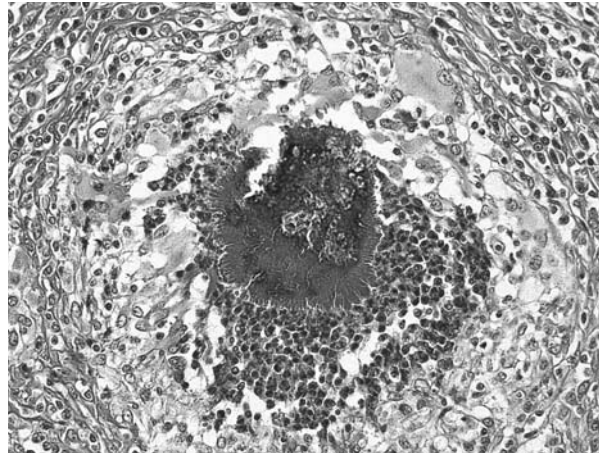


図2 豚のリンパ節, *A. pleuropneumoniae* 2型によるアステロイド小体を伴う肉芽腫性リンパ節炎。アステロイド小体の周囲には好中球, 周囲に類上皮細胞, 結合組織の増生を認めた (HE染色 ×400)。 (富山県食検出題)

**診断名：***A. pleuropneumoniae* 2型によるアステロイド小体を伴う肉芽腫性リンパ節炎

**討議：**肺実質に病変がなかったことから、リンパ節への感染経路についての質問があった。他の臓器では治癒したが、リンパ節のみ残ったのではないかと考えた。

(以降、次号につづく)